

石垣原古戦場小公園の

由来と温研所長のことども

矢野 春 海

「石垣原古戦場跡」という小さなお庭が別府市荘園にあります。七つ石公園から山手に向かって少し上った所です。

矢野甘泉（嶺雄）が昭和六年「石垣原懷古」という詩を作りました。

憶い見る当年の古戦場

海海岸を嘯んで愁腸を洗う

忠魂一たび去って今何くにか在る

満野の秋風恨みを惹いて長し（原漢文）

という漢詩です。この詩が深田光靈氏や後藤岳星女史に依り、詩吟として昭和三五年頃から人口に膾炙されるようになりました。甘泉は、慶長五年（一六〇〇）九月十三日、今から四百数年の昔、この別府の地で戦われた「石垣原合戦」の文書・資料を読んで、大友方の侍大将であった吉弘嘉兵衛統幸の、その忠誠心と苦衷を強く感じ肝に銘じたものと思われる。甘泉がペンで書き記したのであろう合戦の歴史の古い

文章があります。旧仮名遣いや変体仮名の文章です。

ここで矢野甘泉（嶺雄）の紹介を簡単にします。甘泉は、明治二十七年宇佐市下乙女に生まれ、昭和五十六年三月、八十七歳で没。幼くして母に死別、矢野の菩提寺松月寺で育ち、小学生の頃長崎の皓台寺に入門修行をよくし、進んで駒澤大学に苦学し禅宗の僧侶としての優れた人格・識見を培いました。

大正十三年、三十歳にして一念発起し、無一文の中、養老慈善の志を以て翌十四年二月別府養老院を設立、終戦直後までの二〇年余の間、墨染めの法衣を纏い、托鉢しながら孤独で薄幸な老人を看取りました。別府における養老院の嚆矢でした。

戦後養老院は、社会事業として食責その他の公的補助も始まりましたが、甘泉の生涯を通して、その慈悲の掌に暖かく看守られてこの世を去って逝った老人は八百余名に上りました。なおその功により叙勲の榮譽にも浴しましたが、現在もその事業は孫に引き継がれ、「はるかぜ」の名で老人福祉に力添えをしています。

閑話休題、家に「矢野家の系譜」というものがあり、甘泉より一〇数代を溯った矢野統親という人物の項に「石垣原ニ

出陣、討死ス」とあります。

因に吉弘公の御紋は、花杏葉といえます。矢野家系譜にあります紋も同じであります。甘泉が作った最近の系譜には、「統親菩提の為その古戦場に昭和四十年古戦場公園を開設す」と書いてあります。

公園にある『石垣原合戦殉節烈士の碑』の由来について触れておきます。

この小さな公園より通りを隔て、蜿蜒と石垣を巡らした中に広大な自然森と病院があります。昭和六年に建設された「九州帝国大学温泉治療学研究所」、略して「温研」と呼ばれていた病院です。現在は九州大学病院先進医療センターという名称ですが、初代の所長は田原淳教授で、この方が敷地内の西半分の原野をそのままに残されたそうですが、第五代の高安慎一博士、この方も立派な方だと聞いていますが、この方が原野を以後も手付かずのままに温存するのに大きな役割を果たしたと言われます。その頃、不思議な事が起きたり、不思議なものが見えたり聞こえたり、また変な事件などもあったようです。このことについてある人が「この地は三百余年前合戦のあった所で、沢山のさむらいがここで討死しており、これは供養するのがよい」と云ったことを聞かれ、武士たち

の血が流されたであろう石に「石垣原戦殉節烈士の碑」と書かれ供養していたそうです。高安博士が甘泉とどのような話をされたかは分かりませんが、僧侶である甘泉にその碑を祀ることを託され、ご高齢で昭和四十八年三月に亡くなられました。かつて博士が、夫人の押される車椅子で、この公園にお参りされたお姿を覚えています。荘園に住む長老の方からその頃の昔話を色々聞いたこともあります。

昭和四十二年、ようやく公園らしくなりました。「石垣原古戦場趾」と書かれた石碑を道路に向けて建て、高安先生の



矢野甘泉と創設の頃の古戦場公園

「烈士の碑」を中心に祀り、同時に、吉弘統幸の「あすは誰が草の屍や…」の辞世の句と、甘泉作の「石垣原懷古」の詩を大きな石に自筆の字で彫りそれを配置し、供養塔も置き、小さいながら整備して形を整えました。個人の屋敷の内、道路沿いの僅か四十坪のものです。甘泉は書道にも堪能でした。郷土の先人今村珠江先生は、漢詩に吉弘統幸を称え「千秋永く駐む義人の名」と詩われております。明治の詩人綿引東海は別府の地を訪れ、土中に埋もれた矛や

折れた武器などは未だ銷え去っていない、雨の夜などさむらいの哭く声が蕭々として聞こえると詩に読んでいます。この莊園の地は、石垣原合戦の激戦の真った中の土地であり、吉弘統幸の奮戦は言わずもがな、黒田、大友兩軍、敵味方に関係なく、多くの武士たちの血が流されたことに哀れをおぼえ、禅僧甘泉は、ここにその霊をお肥りすべきであると、小公園設立を思い立ったに違いありません。

物言わぬ仏像群 堀田「五百羅漢」

非会員 堀田 井 上 友 介

別府市堀田の旧堀田西温泉前にひっそりと祀られている五百羅漢があります。いつ、だれが、なんのために作ったかわからず、今もなぞにつつまれています。笑った顔、瞑想にふけた顔、おどけた顔、さまざま表情の羅漢さんたち、一つ一つ見て歩くと友人知人にそっくりの顔に必ず出会うことができます。

この五百羅漢については文献も無くおそらく江戸時代ぐら



荒廃著しい五百羅漢像